

えども教育できなかつたと記録に残っていますね。三人の共通点は無感動であった。じゃ、無感動の少年は放っておかないという方が大事だと思えますね。無感動だからどうしようもないと言って放り出すのではなく、そういう人たちに対しては感動する動機を作ってあげる。つまり種まきをするということですよ。これが大切でございます。私も多くの人たちに接してまいりまして、失敗もあれば思いもよらないような結果を得たこともありましたが、私はその人たちに「用を頼む、用事を頼む」ということをきつかけにしているんですね。頼んだことをやってくれたことに対して、それが些細なことであっても私は大いに喜んで、相手にお礼を言う。私の喜びを伝える。褒める。これがですね、種まきの素であると思います。あるとき、埼玉県川口市の△△中学校で掃除したとき、三人、器物損壊の生徒がいたんですね。彼らが学校に来ると何か壊す。学校としては来てほしくない生徒が三人います、その三人が掃除の会に来たんですね。私たちの仲間が三人それぞれに一人ずつついて、丁寧に教えて褒めたんですね。「上手じゃないか、道具の使い方が上手い、よくその汚れが取れたね」と次から次へと褒めたんですね。なんとその少年たちが最後まできちっとやり通しました。そのことを校長先生に報告したら、校長先生が明るく日、月曜日の朝礼で全校生徒の前にその三人を呼んで褒めたんですね。なんとその少年たち三人が連名で「学校修

理屋、なんでも申しつけてください」と書いて持ってきて、その日から一切そういう行為（器物破損）をしなくなったということですよ。これは事実なんですね。今月末に少年保護施設から帰ってくる少年が◎◎県にいますが、これも手に負えない少年だったんですね。その彼が私の言葉が書かれています。「レンダーに出合ったことから、「私に会いたい」と言い出して、先生は「掃除をしたら会えるようになる」ということで掃除を始め、私は彼に会いに行きました。彼は翌年の四月までが矯正期間だったんですが、彼が少年保護施設に入るなりすぐにトイレ掃除を始めたというんですね。「こんな子どもは来たことがない」ということで会うことができたんですね。ということでは何か用事を頼む、手伝ってもらおう。それがチャンスです。その時に大いに喜ぶ。これが種まきになって根と芽を育てていくと思えます。それが全て通用するかどうかわかりませんが、そのきつかけとして「掃除」が一番いいと思いますね。中には残念ながら、忘れ物をした生徒に罰としてトイレ掃除をさせる学校もありますけれど、それも良いです。罰でやらせるのも良いです。その時に生徒だけでやらせたら本当の罰になつてしまふ。その時にどうして先生と一緒にやらないのか。一緒になって肩を並べてやったら大いに効果があつて、反省のきつかけになるんですね。「お前、トイレ掃除30分してこい！」ということになったら、マイナスになることはあつてもプラスになることはない。

【編集後記】あるトイレ掃除研修で参加者の一言に驚き、掃除指導の難しさを感じ、参加者への接し方を考えさせられました。彼女は中学校の時、掃除に学ぶ会の指導を受けて、清々しい気持ちで味わうどころが大嫌いになって嫌なことしか残っていないと話してくれました。その彼女が内定を受けた会社の研修でトイレ掃除があり、あの辛かったことが思いだされ憂鬱な気持ちで臨んだとのことでした。トイレ掃除指導をされる方は、掃除後の達成感などを味わっていて、掃除後の感動、掃除の魅力、素晴らしいことを伝えたいと熱く、テンションが高くなっていると思えますが、初めて参加するほとんどの人は指導者の対極にいると思えます。つまり、指導する側と受ける側の熱量の差はものすごく大きいということです。楔にしなければならぬと思います。道具の準備に始まり終了までの一連の流れが整っていることが大事で、リーダーはオーケストラの指揮者のような存在だと思つていきます。演奏家の表情を注意深く見て、その音色が十分に響くように導くことが役割であり、掃除リーダーは寄り添って具体的なやり方を示しながら、取り組む姿勢に温かい言葉がけをすることが大事だと思つてます。結果を求めるのではなく、その過程を認めて、褒めて褒めることでやる気のスイッチが入ると思つてます。限られた時間内でトイレ全体をきれいにしようとする参加者との関わりが薄くなりがちです。掃除の楽しさ、魅力を体感することで一人の百歩から百人の一步に繋がります。高野修滋 拜

トイレ掃除は「自分を知る最捷徑」である。

# 便教会新聞

第171号

令和4年5月

便教会は、教師の教師のためのトイレ掃除に学ばず、実践あるのみ」の教育方針で、自らの人格を高めていくことを目的としています。

便教会新聞発行責任者 高野修滋

〒四四五一〇八〇二

愛知県西尾市米津町天竺桂二七

TEL 〇五六一一五六一四三二七

携帯 090 - 4215 - 1727

## 『トイレ掃除は自己肯定』

東海 学園 大学  
養護教諭専攻 松葉 芽生

私は一人暮らしをしているが、昨年の便教会に参加してからは、トイレと勉強机周りの清潔を保ち、整頓することを徹底している。これまでは忙しくなると、トイレ掃除は汚れが目立つまではやらない、勉強机の上にはいつも教材が出しっぱなしという生活であった。しかし、便教会に参加し達成感を得てからは、本当にトイレ掃除が好きになり、定期的に掃除するようになった。また、便教会で「綺麗を広げる」ということを学び、ひとつ整頓されたお気に入り場所を作ると、おのずとその周辺にも気を遣うようになることがわかった。勉強机の周りには常に整理整頓された空間であることを心がけるようになった。このようにトイレ掃除に参加し、自分の生活に様々な変化があつたため、第22回便教会も参加することを決めた。

掃除場所に到着し、はじめに自己紹介をした。これから一緒に作業をする仲間の中には教員や外国籍の人、小学生、大学生、農業を営む方など様々な人がいた。私が担当したのは女子トイレの和式便所だ。昨年も参加したからか、第一印象は「汚い」ではなく、「やりがいがありそう」だった。山中敦子さんに道具の使い方や清

掃の順番を教わりながら行った。最初に、スポンジで便器にたまつた水を抜く。抜いた水をバケツへと流すのだが、スポンジの絞り方にも、スポンジを傷めず、長期間使用できるようにするためのポイントがあつた。また、水も限られた資源として、できる限り少量で掃除を行うように心がけた。次にスポンジで大まかに便器の汚れをふき取り、洗剤とナイロン製タワシを使って便器の内側の黄ばみなどの汚れを落とすといった。一か所を真っ白にして、綺麗を広げていくイメージで行つていくのがポイントだ。一か所とでもきれいな場所を作ると、他の箇所の汚れが際立っていくのを感じた。身を低くして便器と向き合っていて、腰や足が痛くなつたが、それ以上に着々と綺麗になる便器を見て、楽しさが勝つた。そして便器が綺麗になったら、流す部分の金属レバーは洗剤とタオルを、壁や床はスポンジを使って掃除を行った。一見汚れなく見える壁も、使つた道具がすぐに汚くなり驚いた。また、トイレのにおいの原因は、ほこりがその臭いの元を吸着するからであり、見えな部分にも目を向けることの大切さを知つた。その後、水や道具を大切にしながら使用したものを綺麗にして掃除は終了した。

掃除が終わつた女子トイレは最初の印象とは大きく異なり、光がさして神々しく見えた。一連の作業の中で、同じ場所を掃除する仲間同士で道具を借り合つたり、声を掛け合つたりする姿が何度も見られた。トイレ掃除は個で行うイメージが強かつたが、同じ目的で取り組む楽しさを掃除で体験できると思わなかつた。また、仲間同士で感想を言い合つた際に、全員が満足し、新たな気づきがあつて、国籍や年齢にとらわれずに皆で夢中になれることもトイレ掃除の魅力の1つだと感じた。

今年の便教会では二点のことを学んだ。一点目は「視点を交えることの大切さ」である。今回の参加は二回目であり、前回は男子トイレを掃除した。小便器と和式便器とは形状が異なるため、汚れる部位も違つてくる。また、形状が違うからこそ同じ道具を使つても、使う部位や角度を工夫しなければならなかつた。特に、金隠しの裏の部分は陰で見えにくく、のぞき込まないと汚れが確認できなかった。和式便器を黙々と掃除していると、汚れの落ちない部位が気の合わない人のように思えてきて、この人をおのずかには、どんなアプローチの仕方があるのだろうかと考えながら取り組んでいた。そう考えると、人と接する際も視点を交えてみる必要がある場面が多いと感じた。たとえば養護教諭が保健室内から見ると子どもの姿と担任が見ると子どもの姿が必ずしも一致しないことがある。その際には自分の主観だけでなく、授業中の姿を見に行つたり、担任以外の子どもと

掃除の出会いが、人生を根底から変えることがある。

関わる教職員から話を聞いたり、角度や視点を変えて見ることを大切にしながら人と関わっていかうと思った。

二点目は「掃除は人の心を育てる効果があること」である。掃除の後に行った討論の際、日本には「きれいなイメージ」があり、外国人労働者の方はそれを知り、率先して行動に移していることを知った。しかし、農業を経営する方から肝心の日本人がそれをできていない、率先していないという話も聞いた。その方は、新人研修でトイレ掃除を取り入れたとおっしゃっていた。新人社員研修で掃除を取り入れる会社は少なくない。それは掃除に対する姿勢と仕事に対する姿に共通点があるからではないかと思う。トイレはほとんどの人が使う場所、そして汚れやすい場所である。しかし、自ら綺麗にしようと思わない場所でもある。掃除をすることによって、給料が上がるわけでない、認められるわけでもない。しかし、利益だけでなく、トイレを使う他の誰かのために一生懸命になれる人は、仕事に対しても誠実に向き合える人なのではないか。また、今回掃除を行う中で自分の工夫がすぐに成果として現れることに気づいた。便器を真っ白にするという目標を達成するために考え、工夫し、実践し、成果がでるというサイクルが短期間に行われるために、自立性も養われるのではないかと感じた。作業中に山さんは「やるまでが長い、やってしまえばあつという間だ」とおっしゃっていた。努力の成果がこんなにも早くでる掃除は、自己肯定感が低いといわれる日本子どもたちにとって良い活動になるのではないか。トイレ掃除からく

るやりがいや達成感、自己肯定感や自己有用感

もともと掃除をすることは嫌いではなく、むしろ好きな方です。掃除をした後のすっきりした気分が好きなのか、掃除をしている自分が好きなのかはわかりませんが、掃除は行っている自分もきれいになったトイレを使う人の気分を良くしてくれます。また、使う人の立場に立ち、思いを込めて行えば、いろんなことにも気づけます。これまでの私にとって掃除は汚れを落とすことが一番の目的でしたが、今回の経験から、ただ汚れを落とすだけでは、本当の意味での「きれい」を実現できないことにも気づきました。掃除は汚れを落とすことももちろん大切ですが、気持ち良く使ってもらいたい、その場所をきれいにしたい、道具に対しても感謝するといったように、掃除は人とモノへの思いやりをもって行うこと、そんな心配りが大切だと分かりました。

また、お掃除を行う前にグループのリーダーの方から「自分の心を磨くように、便器も磨きましょう」というお言葉がありました。掃除は心を無にして純粋な気持ちで取り組むことができると思います。その掃除を行ったことで、自分の心が磨かれたのか、きれいになったのかは実際にはわかりませんが、自分の体感としては、行う前と比べるとやはりスッキリと晴れやかな気持ちになったように感じました。さらに掃除をしている最中、そして掃除を終わった際に私の頭の中に浮かんだのは、このトイレを使う生徒たちのことでした。「きれいになった

の向上につながると思った。

便教会の中で様々な立場の人と関わり話をした。本来であれば関わることのない方々とトイレ清掃を通じて話を聞くことができてとても有意義な時間を過ごすことができた。私たちは多くの人たちの支えがあって生きている。それは日常生活の中で意識しないとわからない。しかし、一日に一回は生かされていることに感謝していきたいと思う。また、何かに支えられて生きていることに感謝することを、養護教諭になった際には子どもたちに伝えていきたい。そのため、便教会で学んだことを学校でのトイレ清掃の指導に活かしていきたいと思う。

### 『トイレ掃除は感性を養う』

東海学園 大学  
養護教諭専攻 伊藤 向日葵

今回、所属する大学のゼミ教員のお誘いを受け、第22回便教会に初めて参加させて頂きました。便教会の存在は大学生になって初めて知りましたが、このような会に積極的に参加する人がいること自体が正直、驚きでした。大学2年生の時にも開催されることは知っていました。が、新型コロナウイルス感染症の流行もあり、家族からなかなか理解が得られず、参加することができませんでした。しかし、「今回は是非参加してみたい！」という自分自身の強い気持ちとご縁がつながり、参加できたことを大変嬉しく思っています。

初参加だったため、参加する前は「どんなトイレを、どんな人たちと掃除するのだろう」とトイレを見た生徒たちは、どんな反応をするだろう、「私たちが掃除をしたトイレを使用する生徒たちが、少しでも気持ちよくトイレを利用してくれるのと同時に、これから少しでもきれいにトイレを使おうと思ってくれたら嬉しいな」という想いでした。

掃除後の報告会では、参加者のみなさんと感想や意見を交換することで、さらに、様々な人の考え方や感じ方を知ることや学びや気づきが深まり、自分自身を見つめ直す機会となりました。参加者の方からはいろいろなお話を聴かせて頂きましたが、その中で最も印象に残っている言葉があります。それはある先生がおっしゃった「トイレの便器は子どもと一緒に掃除する」という言葉です。これだけ聞くと困惑しますが、先生のお話はとても納得できるところがありました。

便器は私たちが出した排泄物やトイレトペーパーをきれいに洗い流してくれます。しかし、使い方が良くなかったり、トイレトペーパーを流しすぎたりすると詰まってしまいます。それを、子どもにも重ね合わせると、子どもたちは大人や周りの人の話を上手に受けて流します。必要なものは受け止め、不必要なものは聞いて流しますが、抱えられないほどの大きな課題が突然来たり、ストレスとなるのが重なったりすると、受け流すことができなくなります。そうすると、自分の状態について言葉にすることが苦手な子どもたちは症状として表すようになるということです。そのため、便器と同様、詰まる前に、受け流すことができなくなる前に、対応することが大切なのだと思えました。便器なら詰まる前に定期的に掃除をしたり、詰ま

想像を膨らませていました。トイレは私たちの健康を保ち、感染症の拡大を予防し、尊厳をもった暮らしをする上でとても重要な役割を果たしています。しかし、それを理解していても、トイレはきれいな場所というよりも、汚い場所という先入観の方がどうしても強いので、最初は少し抵抗がありました。さらに、今回掃除をさせて頂いた学校のトイレは、5Kと言われるような、汚く、臭く、暗いトイレであり、まさに生徒たちが使用することに強い抵抗感を覚えるようなトイレだと感じました(後で思い起こせば、掃除をさせて頂く上では、とてもやりがいのあるトイレだったと思います。)

今回私は、男子トイレの小便器を担当しました。掃除をする際に一番驚いたことは、掃除をしても水を流してくれるセンサーやボタンがないため、汚れを流すことはできません。そのため、バケツに水をくみ、便器に水を流しながら掃除を行いました。また、使用した道具も、トイレ掃除に用いたことのないようなものばかりで、私にとっては全てが初めての経験で、印象的なものでした。

掃除に取り掛かってすぐは戸惑いもありましたが、一緒に参加している仲間や先生方が熱心に取り組む姿を見て、「誰よりもきれいにピカピカにしてやるぞ!」という気持ちで掃除を行いました。掃除中は、できる限りトイレを傷つけないように、トイレも道具も大切にしながら掃除をすることを念頭においていましたが、いったんスイッチが入ると、身を低くして、便器に正面から向き合い、いつの間にか夢中になって取り組んでいました。普段の生活では一つのこと

に時間を忘れるぐらい夢中になれることは、知らないように利用したりすれば良いですし、最悪、詰まってからでも対処すれば、また元通り使用することができるとも思いません。しかし、子どもは違うと思います。子どもの場合、元通りになるには多くの時間が必要となり、完全には元の状態に戻ることが難しくなります。そのため、子どもたちが受け止めきれなくなる前に早期発見・早期対応を行うことが重要だと思います。便器と子どもは、モノと人で全く別のものでありながらも、こんなつながりがあったのかと思うような、印象的で新しい気づきをもたらしてくださった先生のお話でした。

今回の便教会への参加は、私にとって自身自身を見つめ直し、自身の内面を磨けたと同時に、深い学びや多くの気づきがあった実のある経験でした。参加することができて良かったです。ご縁がありましたら、また参加します。

### 一問一答

日本を美しくする会  
相談役 鍵山秀三郎

**問** 「凶悪犯がトイレ掃除をして改心した事例でどの凶悪犯もそうなるのか、その見極めを知りたい。

**答** 古い話でございませうけれど、吉田松陰がたくさんの少年を教育しましたね。いづれもその人たちが明治維新で大活躍しましたけど、あの教育の天才と言われた吉田松陰が三人教育できなかった少年がいるんですね。その三人の共通点は何か。「無感動」であった。感動しない少年は吉田松陰とい

吉田松陰が久坂玄瑞に宛てた手紙に『遠くまで達するかは行為の厚い薄いを示し、広く伝わるかは志の深い浅いを示す。心を天地の間に立て、一命を人民の間に立て、古の偉人のあとを継ぎ、万世に開くのです。』と書かれています。世代交代する中で掃除に学ぶ会の活動、実践、その心がどのように伝わっていくのか心配せざるを得ません。便教会活動も例に漏れず、教師の参加者が少なくなっています。私自身が教育現場を離れたこともあり、教師を含めた若者、大学生に「掃除の魅力・素晴らしさ」を伝えていくことに重点を置くことに変わりました。世の中が変わっていくには時間がかかりますが、続けなければ、やらなければ心の荒みがまん延し、社会の活力が失われ後退するばかりです。「一人の百歩より百人の一步」という言葉を皆さんご存じで、便教会新聞を読まれている方は皆さん、善友力を発揮されていますが、今ひとつ活動に何かプラスアルファしていただき、新しい風を吹かせていきましょう。吉田松陰先生は「志を立てて、もって万事の源となす」「何事もならぬといふはなきものをならぬといふはなさぬなりけり」と遺しています。

「コロナ禍で活動をストップする」のではなく、やり方を変えるチャンスと捉え、進んでいきたいです。私たちは皆、「死ぬまで生きています」。

高野修滋 拝